

「健康教育実施前後の子宮頸がん予防意識の変化について」
～HPV ワクチン接種対象年齢生徒への指導を通して～

土屋 隆子（山形県母性衛生学会会員）

I はじめに

「がん」は2人に1人が罹患すると言われる時代となった。中でも「子宮頸がん」は、若年層で発症する割合が比較的高く、妊娠出産適齢期の発症も報告¹⁾されていることから早期発見・早期治療の必要性を強く推進したい疾患である。子宮頸がんの原因となるHPVへのワクチン接種は、これまでも公費接種の環境整備がされており、令和3年4月からは積極的勧奨としているが、接種率は約3割にとどまっている現状²⁾である。その中で、現在国が認可している予防効果の高い9価ワクチンは15歳になるまでに第1回目を接種することで、3回必要な接種回数を2回で完了することが可能となる³⁾ものである。

今回、教科指導で扱う保健の「がんの予防」に産婦人科医師を講師として招聘し、子宮頸がん予防に関する授業を計画した。子宮は「いのちを生み育てる器官」であると同時に、子宮頸がんを正しく理解するには性感染症であることの学びが欠かせないからである。産婦人科医師に講演していただくことで、がん予防意識と共に「いのち」に対するより深い学びが提供できるのではないかと考えた。指導の対象とする中学2年生はちょうどHPVワクチンの定期接種の対象にあたるため、「子宮頸がん予防」を自分事として捉え、行動化を推進する最適なタイミングであると考え。併せて学習の振り返りを促すための便りを複数回配付し、生徒がそれを持ち帰る家庭との連携にも配慮しながら、健康教育を推進し効果を調査していきたいと考えた。

本研究は、産婦人科医師による子宮頸がん予防の健康教育実施前後の中学2年生の子宮頸がん予防意識の変化を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

- 1 対象 村山地方のA市中学校に所属する2年生：101名
- 2 研究期間 2023年11月22日～12月20日
- 3 調査方法

第2学年保健「がんの予防」の単元で産婦人科医師を講師に招聘して授業を実施する。この際A市保健課 保健師にA市のがん予防の取組を紹介していただくことも含め、連携を図りながら授業を構成し実施する。

4 調査内容

1) 授業実施前（事前調査）

調査内容：①子宮頸がんは性感染症だと思うか？：2件法

②子宮頸がんについて知っていること：複数回答可

③子宮頸がんを含むがんは必ず命にかかわる病気だと思うか？

④自分は将来がんにかかる可能性があると思うか？

⑤※女子のみ回答 HPVワクチンの接種について：1つ選択

⑥ワクチン接種後も検診を受けた方が良いと思うか？

⑦家族と健康やがん予防について話したいと思うか？

⑧自由記述

上記③、④、⑥、⑦は「とても思う」「思う」「あまり思わない」「全く思わない」

の4件法で回答を得る。

2) 授業実施後（事後調査）

調査内容：事前調査と同じ内容と方法で調査し、事前調査と比較する。

HPVワクチン接種の今後の意向を女子生徒に追加して調査する。

5 分析方法

調査で得られた回答は単純集計して、授業前後で割合を比較する。自由記述は主な結果を抜粋してまとめる。

6 倫理的配慮及び留意点

- (1) 調査を実施する際は、校長の許可を得た。調査対象者には調査協力は自由意志であることを説明し、プライバシー保護のために無記名とした。調査参加の有無で利益または不利益のないこと、結果は本研究以外には使用しないことを説明し、調査への回答をもって調査研究家の同意とみなした。
- (2) 生徒の自身の既往や家庭状況について事前に実態を把握し、事業内容も事前に周知する。その上で状況に応じた配慮を講じ、担任および教科担当と共通理解し実施する。
- (3) 現在の科学ではがんに罹患する可能性をゼロにできないため、がん患者を支える社会の必要性に気付かせる方向性で学習を進めることとする。

III 結果

1 産婦人科医師による授業（保健「がんの予防」）

- ・実施日：令和6年11月 2年生合同授業「保健」
- ・主題：「守りたい あなたの生き方 キセキの命を」
- ・講師：真理子レディースクリニック院長 伊藤 真理子 先生
- ・授業の目標：1) 子宮頸がんについて、正しく理解することが出来るようにする。
2) いのちと健康の価値を再認識し、主体的に健康行動が実践出来るようにする。

2 配布した便り及び資料

「がん」の正しい知識、生きることや命に対する理解を深めることを目的として、文部科学省 HP の「がん教育プログラム」⁴⁾を参考に、がんの発生と進行、検診の意味等の内容でシリーズ「がん予防レター」①～④を作成し配布した。（期間：7月4日～7月25日）

日 時	保健だより	その他の資料
11月29日	がん予防レター⑤がんの進行と早期発見	厚生労働省リーフレット 「9価HPVワクチン公費接種について」
11月30日		2年生へ MSD製薬「子宮頸がんとは」
12月5日	がん予防レター⑥がんの治療法 2年生授業成果紹介①	1年生と3年生へ MSD製薬「子宮頸がんとは」
12月8日	がん予防レター⑦がん患者を支える社会 2年生授業成果紹介②	
12月21日	がん予防レター⑧がん患者の思いと支援	

表1：実施スケジュール

3 アンケート結果と考察

有効回答数：88名（87.1%） 事前事後調査共に回答者数88名であり、全て有効回答である。

(1) 子宮頸がんは性感染症だと思うか？（事前調査 n=84 事後調査 n=88）

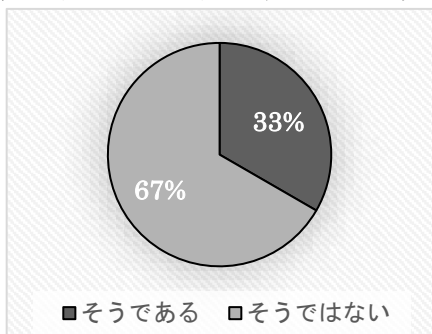


図1-1 子宮頸がんは性感染症か？（事前）

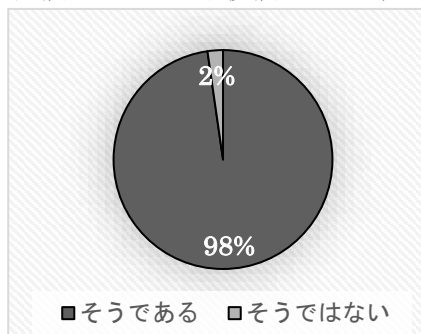


図1-2 子宮頸がんは性感染症か？（事後）

(2) 子宮頸がんについて知っていること（事前調査 n=84 事後調査 n=88）複数回答可

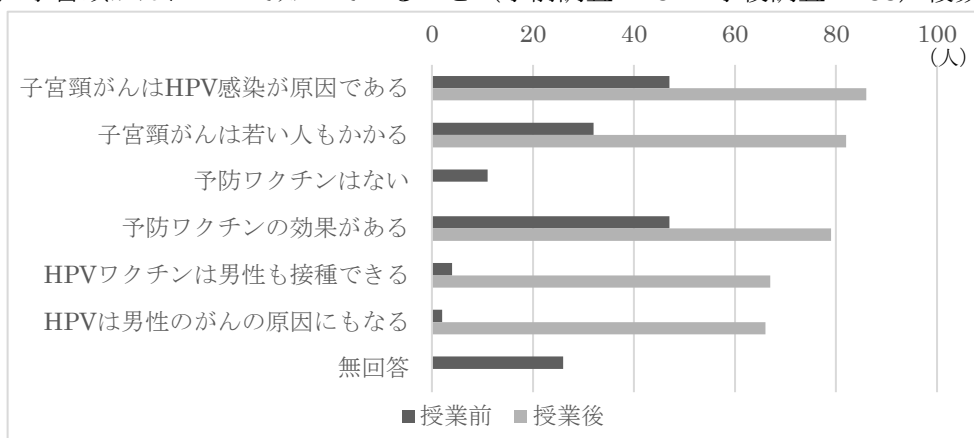


図2 子宮頸がんについて知っていること

授業前における調査でも子宮頸がんが HPV による感染症が原因で予防するワクチンがあると答える生徒が47人おり、ワクチンの周知度は予想以上に高いことが分かった。

事後調査では、ワクチンは女性の子宮頸がん予防に効果があると同時に男性にも有効であり、接種も可能であると答える数が増加し、より正しく理解したことが分かる結果となり。授業の成果が確認できた。さらに子宮頸がんの特徴でもある「若い世代に罹患率が高い」ことを理解した生徒が増加したことも分かる。講師は子宮頸がんの発症が妊娠可能な世代や子育て世代に多い現状を強調してくださった。この理解が積極的な予防行動、すなわちワクチン接種につながることを期待できる。

(3) 子宮頸がんを含むがんは必ず命にかかわる病気だと思うか？（事前調査 n=84 事後調査 n=88）

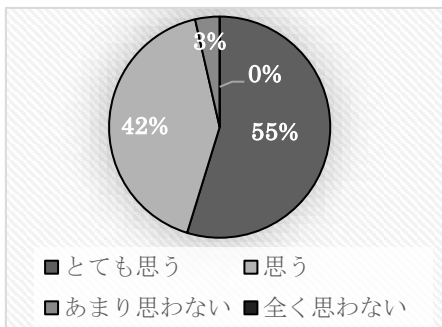


図3-1 がんは必ず命にかかわるか？（事前）

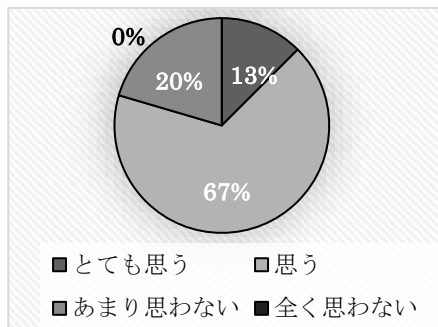


図3-2 がんは必ず命にかかわるか？（事後）

「がん」に対するイメージの変化を見る目的で質問した。がんは命にかかわる病気であるかという質問に事前調査では55%の生徒が「とても思う」と回答している。自由記述欄には「がんで亡

くなる人が多いから」「がんは重い病気だから」「治るからと言っても命にかかわらないとは限らないから」等の記載があり、怖い病気というイメージを持っている生徒が多いことが把握できた。

事後調査では「とても思う」から「思う」に変化した生徒が多く、緊迫感が多少緩和された感じがある。自由記述の欄には「現代医学が進歩して治療法がどんどん見つかるから」「初期段階で発見できたら治療して治すことが出来ると聞いたから」「予防するための方法を知ることができたから」「研究が進んで様々な新薬が開発されているから」等、授業で得た正しい知識をもとに前向きな理由が増えていた。

(4) 自分は将来がんにかかる可能性があると思うか？ (事前調査 n=84 事後調査 n=88)

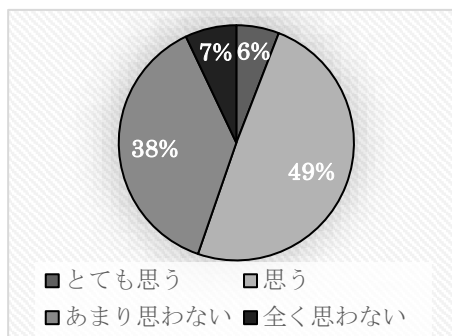


図4-1 自分はがんにかかると思うか？ (事前)

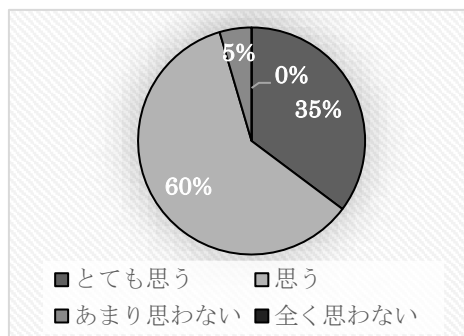


図4-2 自分はがんにかかると思うか？ (事後)

がんの罹患率に関するデータから学ぶことで、95%の生徒が自分事として捉えたことが分かる結果である。自由記述の欄にも「日本人の2人に1人ががんになると聞いてびっくりした。」「日本人の死因の多くを占めるのががんだと分かった」「がんであることに気づくのが遅れたら、悪化するのので気をつけていきたい」「日本人の2人に1人がかかる病気だと聞いて、自分は将来お酒やタバコは避けて生活しようと思った、自分の身体は自分で守ろうと思った」等の記載があり、自分のこととして受け取ったことが分かる。

(5) ※女子のみ回答 HPV ワクチンの接種について (事前・事後調査 n=48)

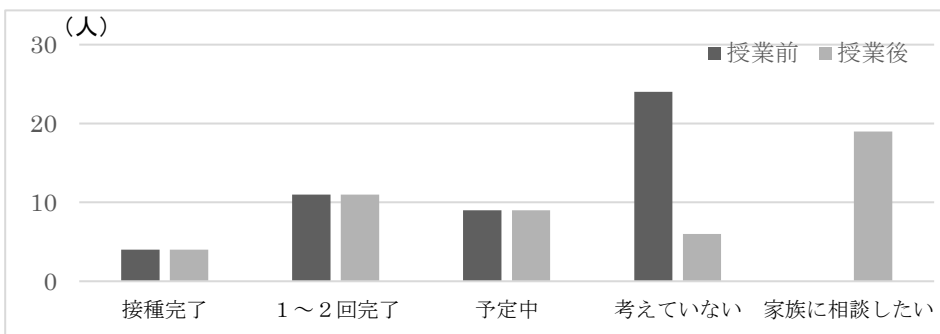


図5：子宮頸がんワクチン接種状況 (女子のみ回答)

本学年で HPV ワクチンを接種完了、接種途中、接種予定を含めた生徒は対象生徒の約40%であった。注目したいのは、事前調査で「考えていない」と回答した生徒が、事後調査に追加した「家族に相談したい」という選択肢を多数選んでいるという点である。自由記述には「自分はまだワクチンを受けていないが、自分の将来のために必要なことが分かったので、接種しようと思った」「がんを予防するワクチンがあるから、これから受けるか親と相談したい」等の記載が複数あった。今後、学校での正しい学びが子どもから保護者に伝えられたり、接種したいという希望が子どもから語られたり、配付した便りや資料を参考にしてもらうことで、子どもの接種につながることを期待したい。

(6) ワクチン接種後も検診を受けた方が良いと思うか？ (事前調査 n=84 事後調査 n=88)

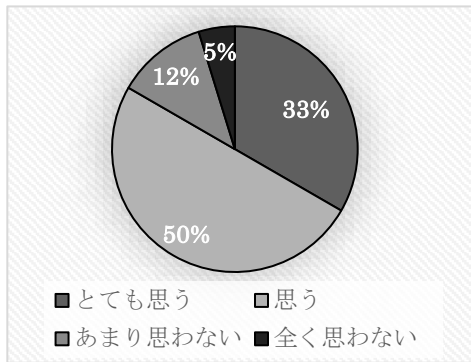


図6-1 ワクチン接種後も検診は必要か？ (事前)

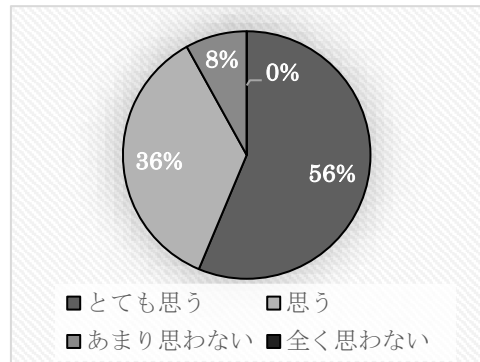


図6-2 ワクチン接種後も検診は必要か？ (事後)

子宮頸がん予防はワクチン接種と定期的な検診がセットである。性別を問わずに検診の必要性が理解できたことが分かる結果である。将来にわたっての健康管理に役立つ知識としての定着を期待したい。

(7) 家族と健康やがん予防について話したいと思うか？ (事前調査 n=84 事後調査 n=88)

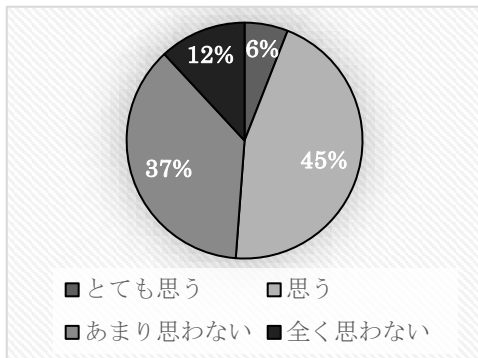


図7-1 家族とがん予防について話したいか？ (事前)

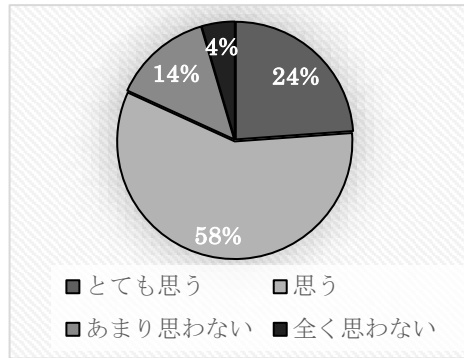


図7-2 家族とがん予防について話したいか？ (事後)

事前調査では家族と健康やがん予防について話したい生徒は 51%であったが、事後調査では 82%まで増加した。「今回の話を聞いて時分の体と心を大切にしたいと思った。自分の将来のためのワクチンのことを家族と相談しようと思った。」と自由記述への記載があった。

(8) 自由記述 (抜粋)

- A 今日のお話を聞くまでは性に関して興味もなく考えたこともなかったが、講師が最初に話された「知らないことが一番悲しいこと」という言葉がとても胸に残った。子宮は命を育てるところである。そして子宮頸がんはつないでいく命の可能性もなくなる病だということを知った。
- B 子宮頸がんワクチンは何となく怖いものだと思っていたが、今日の講演でコロナウイルスのワクチンよりも副反応の可能性が低く、安全なものであることが分かった。教えてもらわないと誤解したままだったと思う。今後は親と相談して接種を考えていきたいと思う。
- C 自分の身体やこれからについて深くかかわってくる授業だったから、すごく聞き入った。自分のことも異性のこともしっかり知って、これからはお互いの体の事を理解し合って柔軟に対応していくことが大事だと思った。
- D 人に聞きにくいから聞けなくて、ネットでしか得ることが出来なかった情報だったが専門家のお話を伺うことができて良かった。自分に関係のあることだから知ることができて安心した。これから責任ある行動をしていきたいと思う。

- E 子宮頸がんについて知らなかったが、治りつつあるがんのひとつだと知って驚いた。講師の先生がお話しされていた通り、そうなるまでにはみんなで理解して、行動していかなければならないことが多くあると思う。自分も協力できることがあるだろうか？
- F 自分の命や相手の命を守るためにも、将来の健康のために今できることを知れて良かった。ワクチンを接種することもそのひとつだと分かったが、家族とよく相談して決めていきたい。
- G 男の自分には関係のないことだと思っていた。でも今日の話聞いてとても関係のあることだと分かった。そして男子もワクチンを打っているところがあることを聞いて驚いた。自分は受けることはできないけれど、知識だけでも持っておいて将来に生かしたい。
- H 授業の最後に保健師さんが各家庭に届いているという子宮頸がんの資料の入った封筒を紹介してくれた。自分は興味がなかったし、母も副作用のことが心配だからワクチンを受けるのはやめようと言っていて、そのままになっている。今日帰宅したら確認して相談したいと思った。
- I 子宮頸がんワクチンの副作用の話が家族から聞き、怖いイメージがあったが、今日の講演でそのイメージが変わった。世界の先進国では普通に打っている話を聞いて驚いたし、自分でももう少し調べてみようと思った。

自由記述では選択回答からは知ることのできなかった生徒の気持ちや、家庭での様子を知ることができる貴重な回答を得た。常に生命に向き合っている産婦人科医師に講師を依頼したことで男女の差なく正しい知識を学び、「生き方」や「生命の誕生」につなげて考えたことが分かる記述があったことは大きな成果である。生徒によっては知的好奇心を持った者もあり、主体的な探究から健康行動へとつなげる学びの可能性も考えられた。

また、HPV ワクチン接種については今なお保護者の不安や疑問が大きい実態が見えた。

IV まとめ

子宮頸がんに関する知識の習得が予防行動への原動力として機能する⁵⁾と言われている。今回の取組において、授業後の調査結果からは子宮頸がんの感染経路や症状の特徴、予防ワクチンに関する正しい知識を得たとする結果が出ている。子宮頸がんが性感染症であるということを98%の生徒が理解し、原因となるHPVウイルス感染は男性にもがんを引き起こす可能性があるとして78%の生徒が認識しており、Gの自由記述にも記されている。さらに、自分もがんにかかる可能性があると思うと、自分のこととして考えられるようになった生徒が95%になった。

また、自由記述A、C、D、E、Fの記述からは専門家による正しい知識が生徒の心に響き、よりよく生きるための行動選択の指針となっていることが伝わり、産婦人科医師をゲストティーチャーとしてお迎えして学習を進めたことの成果が明確にされる内容であった。

そして、HPVワクチン接種対象者である女子のワクチン接種に対する調査も実施した結果、事前調査では「接種を考えていない」とするものが24人(50.0%)であったものが、事後調査では5人(10.4%)へ減少し、残りの19人(39.6%)は「家族と相談したい」と回答し、大きな変容が認められた。

本研究により、学校で行う健康教育で正しい知識を学習することが子宮頸がんの予防行動やワクチン接種の動機付けに有効であることが示唆された。

授業を実施した日には家族との相談の資料となる冊子や資料につながるQRコードを配付し、家族との交流を促進する材料を提供した。ただ、自由記述のB、H、Iの記述にもあるように未だに子宮頸がんワクチンの副反応に関するマイナスのイメージが強く残っていることが予測される。本市保健課では接種対象の各家庭に毎年3月に接種に必要な書類を封書に入れ、届けているとのことであるが、接

種率が伸び悩んでいると聞いた。接種対象者である児童生徒のワクチン接種には保護者の賛同や承諾が必須である。先行研究においても「母親の意見がワクチン接種に直接影響する要因である⁶⁾」とされていることから、生徒への健康教育の強化と並行して、保護者への啓発にも力を入れていく必要のあることも同時に示唆された。

また、家族と健康やがん予防について話したいと思うと回答する生徒が、事前調査の 51%から取組後の事後調査では 82%に増加した。生徒が自身の学びを家族に伝えること(学びのアウトプット)は、学習の振り返りとなり知識の定着につながり、将来にわたるがん予防の行動を促進すると推測する。同時に、各家庭で語られる生徒の言葉は大切な家族のがん検診を促したり、健康増進のための家庭の食生活や環境改善を実現することも大いに期待できる成果を得た。

V おわりに

今後も子宮頸がんワクチン接種の機会を提供している行政と連携しながら、家庭への啓発強化も課題として取り組み、生徒の生涯に渡る健康の保持増進の実現を目指していきたい。

本研究に御協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

(本研究は、山形県より山形県母性衛生学会への委託を受けて実施した。本研究に関連する利益相反事項はない。)

引用及び参考文献

- 1) がんの統計 2023 公益財団法人がん研究振興財団 HP 国立がん研究センターがん統計 子宮頸部
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/cancer/17_cervix_uteri.html#anchor1 <2024.3.1>
- 2) 厚生労働省 HP : HPV ワクチンの接種状況と安全性について
<https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/001128683.pdf> <2023.10.30>
- 3) 厚生労働省 : 詳細版・概要版小学校 6 年～高校 1 年相当の女の子と保護者の方へ大切なお知らせ HPV ワクチンについて知ってください (2023 年 3 月改定版)
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001073356.pdf> <2023.6.1>
- 4) 文部科学省 : 令和 5 年がん教育等外部講師連携支援事業委託がん教育共有サイト「がん教育プログラム」中・高生版 https://www.gankyoku.mext.go.jp/material2/high_school.html <2023.6.1>
- 5) 鈴木孝 : HPV ワクチン接種経験と子宮頸がんに関する認識および検診行動との関連—A 看護専門学校における調査—, 教育医学第 66 巻, 第 2 号, 89-100, 2020.
- 6) 今井美和, 吉田和枝, 塚田久恵, 他 : 看護系女子大学生が実施した女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動 2016 の効果—啓発活動 2015 と比較して—, 石川看護雑誌第 15 巻, 63-73, 2018.
- 7) MSD 製薬 : 疾患啓発小冊子「子宮頸がんとは？」
<https://www.msdconnect.jp/products/gardasil-silgard9/materials/toolorder/> <2023.6.1>
- 8) 文部科学省 : 中学校学習指導要領保健体育, 2017.
- 9) 森昭三, 佐伯年詩雄, 他 : 中学校保健体育, 大日本図書, 2020.
- 10) 古田和江, 山田和子, 森岡都晴 : HPV ワクチンの接種機会における保護者の説明と子宮頸がん予防行動との関連—女子中学生の場合—, 日本衛生学会誌第 71 巻, 第 1 号, 69-75, 2016.
- 11) 和泉美枝, 眞鍋えみ子, 吉岡友香子 : 女子大学生の子宮がん検診受診と HPV ワクチン接種行動の関連要因に関する研究, 母性衛生, 第 54 巻, 第 1 号, 120-29, 2013.
- 12) 小林優子, 朝倉隆司 : 女子高校生における子宮頸がん予防ワクチン接種プロセスに関する質的研究, 日本健康教育学会誌, 第 21 巻, 第 4 巻, 294-306, 2013.